

建設業の達成感 高橋 健（宮坂建設工業株式会社）

私が、建設会社に就職しようと思ったのは高校三年生のときでした。それまで特にやりたいこともなく将来のこともあまり深く考えていませんでした。進学しようとは思っていましたが、どのような職種に就職しようか迷っていました。

私の祖父と父は二人とも建設業に携わっています。一番身近な二人の人間が携わっている建設業という仕事に興味を持ち、二人に同じ質問を投げかけてみました。

「建設業って楽しいの？」

すると、二人から同じ言葉が返ってきました。「達成感がやめられない」と。

工事の途中はつらいこともあるけど工事が完成したときに感じられる達成感がやめられないのだそうです。その言葉を聞き、建設業への興味、また、祖父と父が味わう「達成感」に憧れを抱き、私は土木系の学部に進学しました。学んでいく内に建設業に更に興味を持ち、就職を決めました。

建設業界に足を踏み入れた私が最初に勤務したのは道路改良工事の現場でした。朝は早いし夜は遅く、先輩方が話している内容の意味も全くわからず、充実感など感じられる訳もなく、ただ言われたことをやるだけの毎日で、学生時代に描いていた生活とはまったく違うものでした。

そんな中、測量の計算を自分で行い丁張をかけるよう先輩から指示を受けました。その時は測量の計算方法や図面の見方、何から始めればいいのか全くわからず、ただ図面とにらめっこをして時間が過ぎていきました。そんな私を見かねた先輩がヒントをくれました。図面を注意してよく見れば答えが書いてあると。それからは自分で図面を見て測量の段取りを行い、丁張をかけることが出来るようになりました。出来た丁張に合わせて重機が土を盛り、図面通りの形が目の前に出来上がったときには感動しました。「自分が出した丁張で人・重機が動いてモノが出来た」と。これは関係者全員の力がなければ成し得ないことで作業員さん・重機オペレーターとのコミュニケーション、完成形の

イメージをみんなで共有してきた結果であり、建設業とは力を合わせ協力し合って造りあげていくものだ実感しました。

このことから先輩方の話にも参加できるようになり、作業員さんとの会話も増え少しずつではありますが日々の充実感を感じるようになりました。

しかし、私はこの工事の完成を見ずに違う現場に配置換えとなりました。次の現場も道路現場で拡幅と路盤材の置換え・舗装を行う工事だったのですが、二十四時間片側交互通行の中、年内で片側交互通行を解除するという規制のある工事でした。

そのような期間の短い工事で、現場の作業が終わるのが夜遅い時間になる事もあり、それから内業を行う状況でしたが作業員全員協力しなんとか年内に片側交互通行を解除することができ、工事を完成させることが出来ました。今回の工事は舗装まで行う工事だったので完成形を実際に見ることができ、完成道路を自分の車で走った時にはとても感動しました。いつか子供ができ、大きくなったら「パパがこの道路を造ったんだぞ」、「建設業は達成感がやめられない」と胸を張って言いたいと思いました。

きっとこれが、祖父や父が言っていた「達成感」だと思います。

私なりに感じた達成感ですが、まだまだ祖父や父が感じている「達成感」にはたどり着いていないかもしれません。が、これから、沢山の事を学び、任される仕事を増やし、いずれ一つの現場を任されるようになった時に、更なる「達成感」が感じられるよう頑張っていきたいと思いました。

建設業に抱く印象はあまりいいものではないかも知れませんが、辛いからこそ感じられる達成感もあります。頑張ったからこそその充実感だと私は思います。

みなさんは、毎日の仕事に充実感や達成感を感じているでしょうか。

私は、感じています。このように感じられる建設業に就く事が出来、建設業で働くきっかけの言葉をくれた祖父と父に感謝しています。